



男は 痛い



國友万裕

第20回

『ハッピーアワー』

1. 専門学校のトラウマ

ある週末。突然 Facebook でつながっていたかつての教え子からメッセージが届いていた。「今、京都に来ているんです。よかったら食事でもいきませんか」というメールだった。俺が彼に教えていたのはある専門学校で非常勤講師をしていた頃だった。彼は専門学校から大学に編入し、卒業後は東京で仕事をしていた。大学時代は映画の自主制作もやっていて、俺は先生役で短編映画に出してもらったりもしたものだ。映画の撮影現場の雰囲気がわかって、いい経験だった。

三条で待ち合わせをし、カツの定食を食べながら話をした。彼は仕事をやめたとのことで、これから新たな道を模索中である。今は専門学校の頃一緒だった京都在住の子の家に泊まっていて、この後しばらくは親元に帰り、それから先のことを考えると言っていた。「また京都に戻ってきたいとは思っています」と話していた。こういうパターンの子はたくさんいる。今の子は昔に比べるとかわいそうだ。将来に希望が持てないし、おそらく職場でも安月給で割の合わない仕事をやらされてきたのだろう。仕事のことはあまり根掘り葉掘り訊かないようにしましょうと思った。仕事に満足していたらやめたりはしないだろう。やめるにはそれなりに他人には言いたくない理由があるはずなのだ。

「昨日、あの当時、専門学校で一緒だ

った連中と飲んだんです。先生、マッチョ君（仮名）とプール行ったんですってね」

「どうやら、彼は前日同級生とあって、マッチョ君から俺の名前が出たから、突然誘おうという気持ちになったみたいだった。マッチョ君は、このところ何故か俺のことを慕ってくれていて、Facebook にもしょっちゅう「いいね!」を入れてくる。

「あの子はいい子になったよね」

「前からいい子ですよ」

「そういえば、マッチョ君と付き合った時はお金がかかったんだよねー。海鮮料理食べまくったから笑」

今日の彼とは普通のかつ屋さんなので、一人 2000 円くらいで済んだ。彼らは社会人とは言っても、まだ給料安くて苦労しているだろう。せっかく会ってくれたんだからご馳走しなくてはならない。

「俺は専門学校は、あの後やめたからね。あそこは先生にとってはしんどい学校だよ。9 年も務めたけど。」

「へえ、そうなんですか」

専門学校出身の子たちは、俺が専門学校の苦労を話すとあまりピンとこないような顔をする。大概の子たちは専門学校の時の方が大学よりも楽しかったという思い出をもっている。

前に編入して大学生となったスリム君（仮名）とバスで一緒になった時のことだ。彼は大学生生活がつまらないとぼやいていた。

「専門学校が結構楽しかったんで」

「そりゃ、専門学校の感覚でいたらうまくいかないよ。これで専門学校の先生たちのありがた味がわかったらどう？」

「それはわかりましたけど、編入するまでは、大学のことなんてわからないじゃないですか」

専門学校は学生数が少なく、先生たちが一人一人の学生に目が届くように配慮されている。専門学校の子たちは、編入や就職、留学というプレッシャーが目の前にあるし、入れてもらったのではなく、入ってあげたのだという気持ちでいるから、文句は言い放題。専門学校は学生のわがままもすべて受け入れてくれる。その分、先生たちはしんどいだけでなく、学生の前ではあくまでも学生のご機嫌を損ねないように接してくれる。だから、彼らは先生たちの苦労に気づいていないのである。

専門学校で教えることは、大学よりも数倍難しい。大学の場合は、わかっている学生がいても、わかったものとして先へと進めていく。わからないところは学生が自分で調べるなり、友達に訊くなりするだろうという前提のもとに授業している。しかし、専門学校の場合は、学生がわかるまで教えなければ文句が来る。

また大学生の場合は、単位をもらえればそれでいいと割り切っている。したがって、パワハラ、セクハラ、アカハラ、極端に不本意な点数をつけるようなことでもしない限りは、学生から文句を言われることはない。文句を言ってもどうにもならないのだということは学生の

方もわかっている。どうしてもその先生が気に食わなければ、落として来年他の先生でとればいい、というのが大学生たちの考え方だと思う。それは俺たちの頃からそうだったし、今でも基本的には変わっていない。

ところが専門学校は勝手に違ってくる。大学生だったら基本的に放任していればそれですむが、専門学校生を放任したりすると大変なことになる。とりわけ、やんちゃな学生と真面目系の学生が一緒になると後者の学生たちが文句を言い始める。俺の目から見れば、やんちゃであっても根は悪い子じゃないし、やんちゃ系の子の方がなついてくれるから可愛い。しかし、やんちゃな子をほっておくと、真面目系の子達は先生が教師としての職務を果たしていないという悪意的な解釈をしてしまう。そして、それを教務や上司の先生にすぐに告げ口に行く。さらに専門学校は規模が小さいため、悪口が流れると学校全体に瞬く間に広がっていくのだ。

俺が遭遇した最大のトラブルは、学生からクレームが来て、途中でクラスを変えられたことだ。確かに、この時は俺が選んだテキストが難し過ぎた。俺としては1番上のクラスは毎年物足りない顔をするので、多少難しめのを選んだほうが頑張ってくれるかという思いがあった。しかし、それが裏目に出た。おとなしい子ばかりのクラスだったので、直接には文句を言わない。だから俺は彼らの不満に気づいていなかった。ところが、授業評価のアンケートの結果が悪く、

「わかりづらい、先生を変えてください」とひどく感情的な言い方で書かれたのだった。「うわあ、僕だったらそんなこと言われたら、落ち込んで鬱になっちゃうなあ」と同僚の先生から言われた。他の同僚の先生も、「どの先生だって教師生活の間には、一度や二度はそういうことがあるんだよ」と同情してくれた。学生の言っていることに筋は通っている。しかし、大学だったら、これくらいのことでクラスを変えるなんてことはしないだろう。おそらく学生たちは先生は傷つかないと思っている。先生は大人なのだから、自分たちみたいな若い子から文句言われたくらいのことで凹むような小さな器ではないと思っているのだろうけれど、俺たちだって人間なんだよ!!! 落ち込みに落ち込んだ俺は、この後知り合いのカウンセラーの先生に電話で話を聞いてもらった。「おそらく親分肌の子がいて、その子が他の子を巻き込んだのかもしれないね」とその先生からは言われた。そのとおりのだろう。クラスを変えられてすぐに、先のクラスの男の子のひとりが「先生、缶コーヒーおごって」と職員室までやってきた。「あなたたち、俺のことが嫌だったわけだろう。よく、あんなことをしといて、おごってくれなんて言えるよね」と俺は彼に言った。彼は、「ぼくはそんなこと言っていないですよ。アンケートだって、そんな悪い点数はつけていない。ただ、あの人たちは……」。彼は俺のことを嫌っていないので、悪びれていなかった。おそらく文句を書いた学生も深い

意味はなくしたこと。若い子は残酷。しばしば自分のイライラを先生にぶつけてくる。先生に対するある種の甘えなのだろう。そのことがわかっている、この事件は俺の心に深いトラウマを残すことになったのだった。

その1年半後、大学の非常勤の仕事が増えたため、ついに俺は専門学校とおさらばすることになった。時間的に行くゆとりがなくなったからなのだが、やはりクラスを変えられたショックが大きかったのである。

2. 専門学校の贈り物

今思い出すと専門学校時代は本当につらいことがたくさんあった。よく9年も勤めたものだ。乗り越えることができたのは、一方で「先生、先生」と慕ってくれる子がいたからだ。今でも俺に連絡をとってくるのは専門学校の子たちだ。とりわけマツチヨ君は俺のことを好きでいてくれて、春にはプールに一緒に行き、この後、夏は琵琶湖に泳ぎに行こうかという話にもなっている。彼からしてみれば、親父みたいな感覚なのだろうか。彼も仕事のことでは悩んでいるとラインで漏らしていて、俺に話を聞いて欲しいと思っているのかもしれない。俺としても、先生として、人生の先輩として、メンターになってあげたいところなのだが、世代の違っている俺にはどう相談にのっていいのかわからない。結局人生は自分に正直に生きるのが一番いいんだよ。自分をだましてしていると後で悔い

ることになる。誰がどう思おうと好きなように生きること、それが幸せなんだということしか俺には言ってあげられないのだ。

学生とつきあうのは楽しくて、俺は、大学での教え子も含めて、学生と一緒にいるときの写真を Facebook にアップしている。ある日、Facebook で繋がっている東京のある男の先生とメッセージでやりとりをしていたら、「國友さんは、学生さんに対する面倒見もいいし、いいですよー」と書かれた。「ぼくが面倒見ているんじゃないですよ。ぼくが学生たちに遊んでもらっているんですよ」とレスすると、「それが素晴らしいじゃないですか。若い人たちとそういう関係を構築できるところが素晴らしいですよ」と返事が来た。

確かに普通の大学の先生は元教え子とプールや風呂に入るなんてことはないだろう。しかし、俺と一緒に裸の付き合いをしてくれる元教え子が何人もいるのだ。俺がこうやって、元教え子や現教え子と仲良くやっていけるのは、専門学校で学んだことが大きかったからである。専門学校は学生と友達になれるような先生でなければやっていられない。俺は学生たちと生のふれあいを重ねる中で、若い子の心をつかむ方法も徐々に習得して行ったのだ。そのことが大学の教え子とつきあう際にもプラスとなっている。そう考えれば、理不尽なトラウマも、不可欠なものだったのかもしれない。ここに来て、また新たな Facebook の友達が増えて、沢山の子とこ

れから会って食事をする事になって
いる。このためにお金もためておいた。
今年の夏休みは旅行もしないつもりだ
から、その分学生との飲食代に使おうと
思ったのだった。

ただこの頃、仕事で東京に行った元教
え子からレスがこないのが気がかりだ。
Facebook のメッセージから何度も
メッセージして既読にはなっているん
だけど、ずっと返事はないままだ。彼は
去年の春卒業したのだが、彼は俺のベスト
教え子だった。何よりも俺の行きつけ
のジムのインストラクターのバイトを
していたので、親しくなり、卒業の前に
一緒に先斗町の寿司屋と船岡温泉に行
った。あの時は楽しかった。彼は本当に
話すのがうまく、気のおけない話し方を
してくれる。

彼のような子が息子ならなあと思っ
た。湯船の中で話した時は本当に父と息
子みたいで嬉しかった。しかし、仕事を
始めてしまうと、彼には彼の新しい世界
が出来ていったのだろう。徐々に返事は
こなくなった。まあ仕方がないのかもし
れない。こんなものなのだろう。若い彼
らにとっては1年といえ、結構長い。
その間には様々な新しい出会いや経験
があっただろうし、もう大学時代に親し
かった人のことを考えることもなくな
っていくはずなのである。人間の人生な
んてそんなものだ。友達はやってきては
去っていく。

いつかまた懐かしい気持ちになって、
俺に連絡とってくれればいいなあ。
Facebook でつながっておけば、しばらく

たってからそういう日も来るだろう。わ
ずかな時間でも親父の気分を味わせて
くれた彼に感謝したいと思う。

3. 女性との関係を断捨離

俺がやりとりをしている（元・現）
教え子はほとんど全部男の子である。女
の子とはほとんど付き合っていない。と
いっても誤解しないでほしい。俺は決し
て、女性と友達になれない男ではない。
むしろ友達になるのは得意である。もう
10年くらい前のことだが、「先生は控え
室で一番女の先生と話しているものね
ーうらやましいなあ」とある年配の男の
先生から言われたことがあった。普通の
男の人は女性と話したいという欲求は
あっても、女性の会話のペースについて
いかれない。女性の場合はどうでもいい
ことをあれこれ話すから、それにどうい
う合の手をいれるのか、それがつかめ
ない男性は多いのだ。その点俺は女性と
渡り合えるだけの言語能力をもってい
る。女性の方も、普通の男の人だととっ
つきにくい。だけど、俺は男か女かわか
らんような男だから気楽に話せる。そん
なわけで、女性と話すこと自体は俺は得
意だという自信がある。

しかし、俺は女性との深い付き合いは
避けてきた。かつては付き合う努力をし
なかったわけじゃないが、俺の女性恐怖
はカウンセリングを受けても治らなず、
もうとっくにあきらめてしまったのだ。
なぜ、俺は女性が恐怖なのか？

前に中島みゆきの歌でこういうフレ

ーズがあった。♪崩れそうな強がり、男たちの流行♪ そうなのだ。男は女の前だと強がろうとする。かっこつけようとする。虚勢を張ろうとする。

大学の頃だ。友人にガールフレンドができて、俺の下宿に連れてきたことがある。そのときの彼はいつもの彼とは違って、変に俺のことをバカにしたような態度をとったり、ワルっぽい態度をとったり、強がっていた。なぜ、こんなことをするのか、俺には理解できなかった。一旦強がったら、その後も強がり続けなくてはならなくなる。他の男をバカにしたようなことを言ったり、無理に強がったりするような男が女は好きなのだろうか。

それに俺はやはり女性を憎んでいる。理不尽な感情であるとはわかっていながら、憎しみは終わらない。女がいなかったら、俺は不登校にはならなかった。スポーツが下手なのを見られるのも、上半身裸を見られるのも、男の子だったらそれほど抵抗はない。しかし、女の子から見られるのは耐えられなかった。ローラ・マルヴィは視線の担い手は男だと主張する。確かに性的なポルノとして異性を見るのは男だろう。とは言っても、女も男を見ているのだ。むしろ、一般に女性は瑣末主義だから、細かいことは女性の方が見ているのではないか。女は異性を見てプライバシーを詮索する。女同士で男の悪口をいう。陰口をいう。噂話をする。

俺は女に心理的虐待をされながら、誰にも打ち明けられず、一人で抱え込んだ

結果、取り返しのつかないトラウマを背負うことになった。まだ不登校という言葉もない頃、不登校になり、3年も一人で過ごし、その後大学に入っても、3年のブランクは埋めることができなかった。俺が男の友達と普通に付き合えるようになったのは40くらいになってからで、まだ俺は女性と付き合う前の小学生の心理にとどまっている。そして、その長い苦しみの中で俺の女性恐怖は固着してしまい、もうおそらく一生女性と付き合うことはできないのである。

この頃「断捨離」という言葉が流行っているが、女性と深い関係になることの断捨離を世間は認めてくれるだろうか。女性が男を断捨離して生きるのはい訳が立つ。「私は仕事が面白いし、結婚したら、両立が難しくなるから」。しかし、男はゲイでもない限り、結婚を拒む理由がないと世間は思っている。

今の社会では女性被害は認知されているが、男性被害は認知されていないため、男は傷ついても訴えることができない。男性差別や男性被害は女性差別や女性被害に比べればマイノリティだと言われるかもしれない。しかし、マイノリティであればこそ、傷ついた当事者にとっては大きな問題となる。誰もわかってくれない、誰も同情してくれない、だから、誰にも打ち明けることすらできない。

でも、まあいいか。これも考えようである。女の教え子とは付き合わないほうが無難だ。大勢だったらいいが、一対一でつきあうのは変な誤解を招く。男の教え子だったら、仮に俺がゲイだったとし

でも、大きな問題になることは考え難い。むしろプライベートにつきあうのは男のほうがいいのだ。

4. 『ハッピーアワー』 (濱口竜介監督・2015)

今年の7月の芥川賞受賞作、村田沙耶香さんの『コンビニ人間』は傑作だった。新しい男女のジェンダーとセクシャリティを思わせるものだった。主役の女性は30代後半になって男性経験もなく、ずっとコンビニのバイトの経験しかないという設定。俺と似ている。俺も女性とほとんど深い関わりにならずに生きてきて、仕事も非常勤のまま、正社員になったことがない。

この彼女が男と同居することになるのだが、それがセックスのない、恋愛というのでもない、奇妙な同居生活。しかし、そこに不自然さはなく、むしろ人間的に感じられる。まさに新たな男女関係の創造であると俺は考えた。これは、いい!!! こういう考えが社会にもっと広がればいいなあ。人間は多様。恋愛しない人がいても、どういう男女関係があっても、他人を傷つければ、何の問題もないはずなのだ。

そのうち、この小説、映画になるだろう。この頃日本映画は原作もの以外はなかなか映画にしづらいという話を聞いている。そういえば、この頃、大きな劇場でかかる日本映画は漫画の映画化ばかりだ。でも逆にいえば、原作ものは確実に映像化される可能性が高いという

ことにもなる。

先日、久々にNetflixで故相米慎二監督の『お引越し』(1993)という映画を再見した。もう23年前の映画だ。京都を舞台に、両親の離婚で葛藤する少女の心理を描いている。当時、作品の評価は極めて高く、キネマ旬報のベストテン2位である。

最初に見たときはよくできてはいるけれど、俺にとっては大して関心の持てない話。それほど夢中になることもできなかった。それが、およそ四半世紀ぶりに見直して、面白さに浸った。人間関係の機微の描写が巧いということも思った。俺も年をとって、人間洞察力が増したのだろうか。

またそれにも増して、京都でロケが行われているので、風景のあちこちに親しみがあって、そこが何よりも楽しかった。最初に見たときはそうは思わなかったと記憶している。あの頃の俺はまだ引きこもり、京都でもう10年くらい暮らしていたとはいっても、京都のことは何も知らず、過ごしていたのだ。それが今となっては、すべての風景に既視感がある。俺は確実に京都という土地に根をはってきたのだという思いにさせられた。

この映画では、主人公が両親の離婚を乗り越えて、精神的なお引越しを果たす。でも、これは若いからこそできるんだよね。50代の俺が果たしてこれから変わるだろうか。でも、変われなくてもかまわないか。1日1日を懸命に生きよう。あとは神様にお任せである。

『お引越し』もオススメなのだが、こ

これは古い映画なので、今回の推薦映画としては『ハッピーアワー』をあげておこうと思う。これは神戸が舞台になっていて、『お引越し』同様に、関西の匂いが満喫できる。5時間にわたる長尺だが、これを俺は立誠シネマという京都の小学校を改造してできた映画館で見た。まさに京都を堪能しつつ、5時間たっぷり映画の世界に浸った。

神戸の4人の女性たちのドラマなのだが、印象に残っているのは、中学生の息子がガールフレンドを妊娠させてしまい、中絶のための費用と慰謝料をもって、少年の母親と祖母が相手の父親のところへ頭を下げる。父親は終始偉そうにむっつり顔。少年の母と祖母はひたすら平謝り。帰り道に、祖母が言う。「二人で遊んだ結果、子供ができたのに、なぜ、私たちだけが謝らなきゃいけないのかしらねー」

これは我が意を得たりのセリフだった。昔から妊娠したりすると男のほうが責任をとらされるけれど、なぜ、男が責任とらなきゃいけないの？ 二人でしたことなのに。こういう台詞が映画にで始めたことは一歩前進だ。昔は二人で遊んだ結果、妊娠して泣くのは女性だと言われていた。しかし、今は泣くのは男なのだ。

妊娠に限らない。教え子たちが苦勞している姿を見ると、どこがどう男のほうが特権なのか、あらためて問いかけたくなる。幸せなのは女、痛いのは男なのは！？

男は痛い！です。